

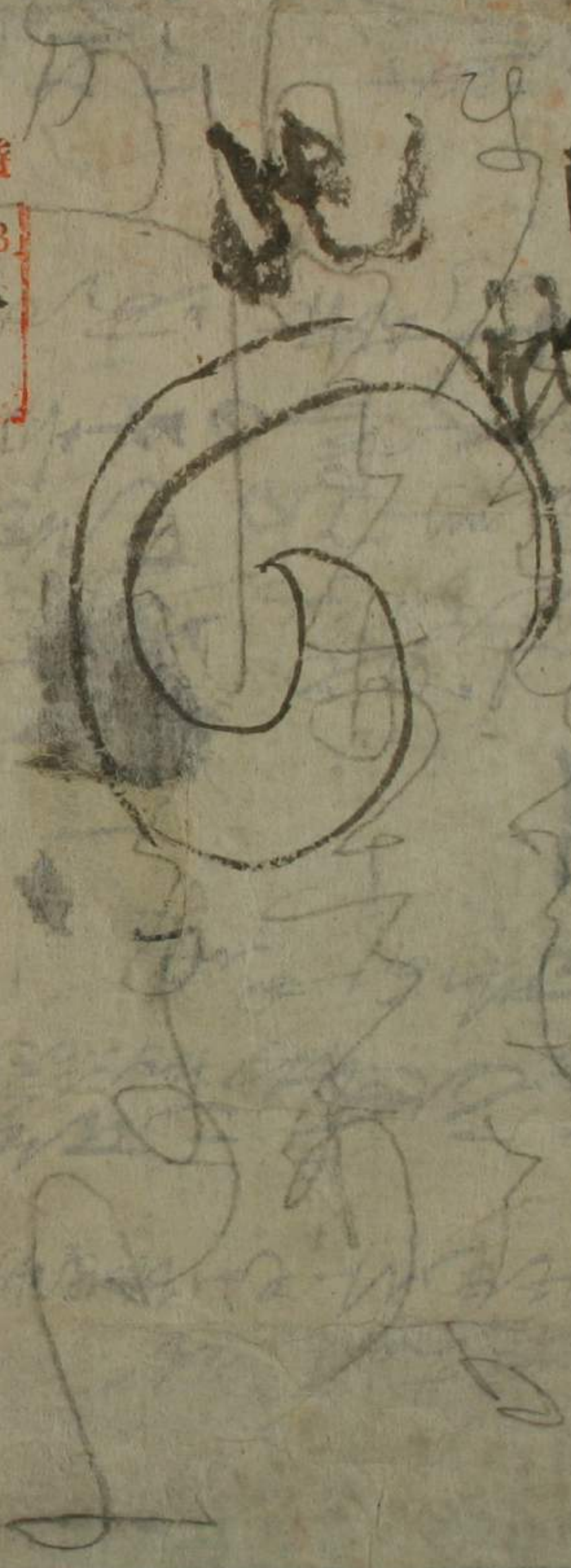


時 13  
204  
11

此本  
此本

此本

此之本



寒燈 夜話 小栗外傳 卷之十五

北都芳

東都

絳山戲編

怨家を討得て孝義を表せ  
佛堂を再建し因縁全し

東都  
北都芳  
算九六編

彼と勇ましく戦ふと云はれど、命惜きものゆゑ、罪を那儘に負ひ、和を  
とらぬこの臆病さよと世の人口ふからんと甚く惜き事なるも、斯くの如く  
和睦を以て故の如く、鎌倉の要領を做しても、みる我を慢り、申すやうに  
彼と勇ましく戦ふと云はれど、命惜きものゆゑ、罪を那儘に負ひ、和を  
とらぬこの臆病さよと世の人口ふからんと甚く惜き事なるも、斯くの如く  
和睦を以て故の如く、鎌倉の要領を做しても、みる我を慢り、申すやうに

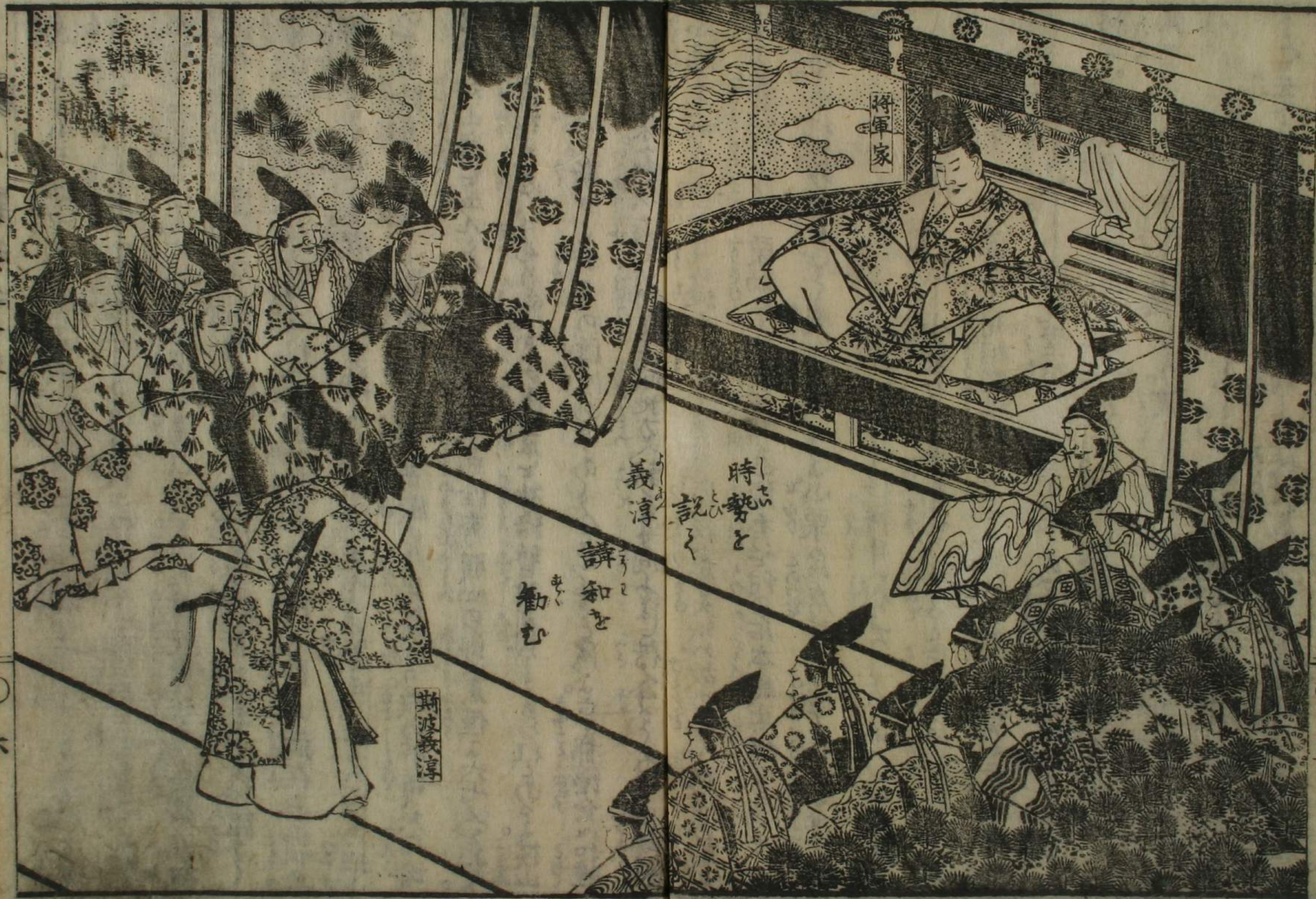


陳取して居る処も只今結城持朝小栗が陳より取りたればいと海軍の意だ  
 陳申小諸へ入對面を互ふ一別後送るべきとあらざりて持朝。せうの  
 此回の一乱鎌倉屋のちね一色詮秀執事。この日詮秀が羊ヶ谷の悪行  
 せうの家牧憲実を護るはよき發ねり。あつた近日詮秀が羊ヶ谷の悪行  
 一討ふ露頭。君もく憤るせうの罪を犯んとせしむるやゆ方へ  
 殺落失ぬ鎌倉との足をもひひの不明を恥く生害あらんとする  
 某まゝ小諸とめまわし。これ君とせうのみあらば今鎌倉殺入  
 ありて東國勿ち乱と京都も危うく天下の患ひ入りて速く京  
 鎌倉の陣中。世に睦あんとを願ふ。せうの足下への陣。居てはかゝる  
 身でこれと議人と不知足下へ意本何と問ふ小栗とせうの  
 及はのよも心を困むるも某も身鎌倉の世臣うそ入昔は近寄る  
 侍り深に恩を蒙り。一旦護者のぬおの勤事を受れどいづくは好  
 忘るれば既母今將軍の命にうて鎌倉へ押寄るは身のかく躊躇て  
 ぬの鎌倉屋よりうそ入との忍がくどく。これ某もさういふお中のこと  
 意ん然れどもみる鎌倉屋の勤事を蒙りしりのまじお中のこと  
 おぐんおすなく侍り足下のごおつてせうを侍。我が想あむの  
 こと持氏も父へ上りて。兩家牧よく護申すは和睦存んとい願ふ  
 せうもりお持朝うきりなく存びて忠義の志を感得たり。その後助き入る  
 及は某千幸万苦して將軍家のぬを蒙り。今回討ふお討ひは父の仇  
 一色を討ひんぬるのりけうお。去向知とせうとせうを精量あれとせう  
 ゆればお朝敵改さそめん世の深なる患ひをひて足下をめてつらん  
 去年某女児を怪獸とせうを足下が郎黨の們我力をめて足下を



三人相渡して持氏の仇を討つる。尚ほ底を破る。持羽下り。詮秀  
 とりて後者の為。正しき由も掩つれ。せまひ瘳とせ。はしり。あや。羞ひは  
 是やどの君。今。種。命。在。ま。さ。る。東。國。忽。ら。乱。と。それ。より。世。の。合。戦。の。街  
 と。あ。り。ん。だ。く。の。和。睦。あ。つ。く。故。の。と。く。水。奥。の。中。と。成。ま。り。天。下。の。大。幸  
 何。う。これ。は。あ。え。と。笑。へ。な。ら。ん。と。それ。が。斯。波。左。衛。門。持。我。淳。は。側。に。侍。ひ。し。る。が。  
 家。校。持。房。が。中。と。進。を。出。り。し。り。其。郷。に。せ。ん。只。今。持。房。が。は。え。し  
 処。し。速。に。許。容。あ。ま。り。と。凍。り。せ。ぬ。軍。家。も。実。ふ。り。と。お。解。し。則。ち。和。睦  
 の。之。れ。に。由。り。持。房。由。賜。り。た。れ。ば。大。喜。ひ。感。佩。し。ほ。と。は。書。を。袖。に。し。り。し。て。さ。き  
 書。の。れ。が。喜。ひ。お。ほ。き。と。大。さ。さ。ら。れ。西。に。向。ひ。く。思。と。謝。し。人。々。も。これ。が。示  
 り。あ。り。と。ま。ま。ひ。斜。ま。り。に。万。葉。を。唱。へ。祝。し。たり。か。が。た。れ。る。ゆ。及。や。も。持。羽。が

忠義よ。より。り。と。恩。賞。の。地。を。教。多。る。り。家。校。憲。実。決。の。故。の。ゆ。に。執。る。の。職。に  
 復。し。家。校。持。房。小。栗。助。を。父。の。仇。一。を。詮。秀。を。討。の。后。本。願。安。塔。ま。さ。と。ん。き。の  
 旨。命。あ。れ。ば。み。る。喜。び。と。感。謝。せ。り。と。小。栗。の。此。序。を。り。て。妻。照。天。女。横。山。を  
 討。さ。し。り。此。より。上。ら。り。何。う。苦。し。に。陣。中。へ。傳。ふ。下。し。命。あ。れ。ば。い。づ。ら。が  
 ぐ。く。家。校。持。房。に。相。渡。し。小。栗。の。追。手。家。校。の。擲。と。定。め。その。勢。が。合。五。百  
 余。緒。永。享。二。年。九。月。中。旬。相。別。護。倉。を。と。り。同。國。太。任。の。府。に。着。ふ。り。是  
 より。横。山。が。居。を。ト。リ。控。現。堂。村。へ。三。里。は。足。ら。ぬ。道。な。れ。ど。昨。日。より。兩。を。や  
 踏。り。と。踏。次。思。う。り。し。は。猶。も。夕。晚。よ。及。べ。ぬ。ゆ。ゆ。も。便。り。思。し。と。太。任。は。陳。え。し。し。  
 初。更。の。夜。を。ひ。より。天。色。晴。く。り。皎。く。る。月。の。ま。け。き。は。白。昼。の。如。く。あり。後。ふ  
 小。栗。の。今。宵。敵。の。不。意。を。討。む。と。後。者。兵。女。助。高。き。と。持。房。が。降。ふ。夜。討。の  
 こと。を。云。ひ。し。し。持。房。も。小。栗。と。同。く。夜。討。を。か。け。んと。あ。ま。も。便。か。小。栗。が。陣。ふ



才しなるあそ途中めく支使行遣らまはたおの意同一とらこひ互ふ  
 主命を通じ各隊は立還り。このはしを報られが斯くて存節を合さごとく  
 出陣の吉兆ありと大將も士卒も喜びあひま心だ控現堂村ふそ赴たり扱  
 又横山安未乃の鎌倉及京都は叛き多し一色が許より吉報しなれば浪なく  
 喜びこの我牙用運の時至れり急だ一色は加勢とと國々散在と備所の  
 部下どもを招く小既二千余騎及びいふ足やの勢あふんうらう強し  
 いまや詮秀は加勢一奇功をまき鎌倉殿の足免を衆の故の所領が安堵  
 せんと始山塞を出んとするふ忽ち一色詮秀腹心の郎党僅に六七人をぞ  
 推現堂村に忍び入り鎌倉の光景を物語皆耐忍がうたれとあるは横山  
 案は相遠斯く我牙の浮沈のあふんととて後よ京都鎌倉の和睦  
 ありて小栗家枚支使はとて此地方へ討ち向ふは侍人等々まきゆせられ  
 今の逃るとも脱逃は此上運を天は任し討ち受これと戦ひ勝ち勝も  
 とはやどるべ今世の人公は住む小栗の栗ゆけれ又押ゆ付定めり  
 彼方此方とまぬよが然國の大君のちあ味方をありのかればはあは  
 然るとれあ詮秀より鎌倉殿あはなすは謀叛とて見京初と傾  
 せんゆさそ四只我のあてしうる大國と領せんも公の手ととされり  
 予借ホとらぬ部下の悪徒のちちやの称津今夜又浅草舎名も天を  
 軍吾南宮山行力丸相模鬼王丸蟻門太郎同次郎熊川入る同次郎を  
 宗徒の人とて勢都合一千余騎控現堂村の塞よ我の近郷の地は  
 代官を夜討め今浪米穀を掠め奪ひこれを兵糧の料と準備すらふ  
 ち討ちを待よ小栗家枚の勢太任陣よりぬと豫て斥候よ中とま  
 処のよ卒還りすらと報られが一色とて見横山の眷属うち集りて



ある時、横山太郎班を呼んで、敵の安内を知らざるうへに、その備を整へ、今夜逆寄し、これを討つ難卵を破るより易うなり。人々も、さ何ぞと云ふと、いと誇るふ速かれが、此議然らずと云ふ。既、その準備、うまんと云ふ。あ、丹次郎安春の兄、丹次郎安嗣、照天の故より、怨を懐け、其中、半生、膝し、今、此評議を、父、道延、おぼせられ、兄弟、功を、奪われん、と、これ、妬、同、席を、進、せ、太郎、父の、宣、知、その、謀、わ、か、似、され、も、甚、危、也、と、奈、何、と、され、九、夜、討、朝、ひ、ま、ど、い、の、寡、を、り、て、衆、を、破、居、の、術、を、思、ふ、今、回、の、い、の、是、よ、反、と、味、方、の、千、金、持、の、ま、勢、の、敵、の、僅、五、百、騎、と、な、小、勢、を、將、く、ま、勢、を、討、と、此、地、方、に、向、ふ、や、の、の、い、う、で、は、ま、後、の、心、に、は、さ、る、人、爾、を、將、く、逆、寄、せ、ら、ん、と、深、く、陥、く、大、なる、破、と、ぞ、人、初、度、の、軍、の、打、負、の、味、方、に、徳、意、は、は、り、始、終、の、防、戦、あ、ら、は、し、只、堅、く、守、ら、ん、と、敵、の、意、を、窺、ひ、し、を、討、め、さ、く、は、し、と、言、巧、し、と、け、ま、衆、を、ね、感、ひ、且、小、栗、が、武、勇、を、恐、怖、し、る、遂、に、次、郎、安、春、が、異、人、の、道、ひ、夜、討、の、後、勢、を、さ、さ、り、明日、討、ま、さ、身、が、か、ま、り、防、げ、と、何、の、備、も、な、し、は、ら、傾、く、運、の、未、だ、ら、ん、と、去、後、に、小、栗、判、官、代、助、重、の、家、次、村、房、と、約、を、定、め、横、山、が、山、塞、を、至、り、た、時、既、に、二、更、め、及、び、り、横、山、方、の、明、日、の、敵、の、意、を、な、ら、ね、し、と、懸、ま、り、今、夜、斗、を、酒、を、破、ぐ、と、い、ふ、と、睡、べ、し、と、甲、夜、より、大、ね、も、士、卒、も、酔、を、と、り、て、熟、睡、を、れ、討、手、寄、せ、され、ど、知、る、の、は、し、小、栗、の、塞、中、静、け、物、音、が、を、不、守、密、に、光、景、を、窺、ふ、後、背、の、方、に、高、く、山、聳、り、前、の、平、地、を、と、深、く、堀、を、あ、り、と、橋、を、押、し、下、り、城、門、を、た、て、り、置、き、こ、れ、の、塞、中、に、討、つ、出、る、討、合、を、橋、を、下、り、か、き、り、け、し、恰、密、固、の、城、と、な、ら、し、小、栗、の、堀、際、を、彼、方、此、方、と、互、に、池、左、目、を、招、ひ、し、り、汝、平、生、水、流、を、好、く、り、此、堀、を、越、く、討、ひ、の、橋、を、

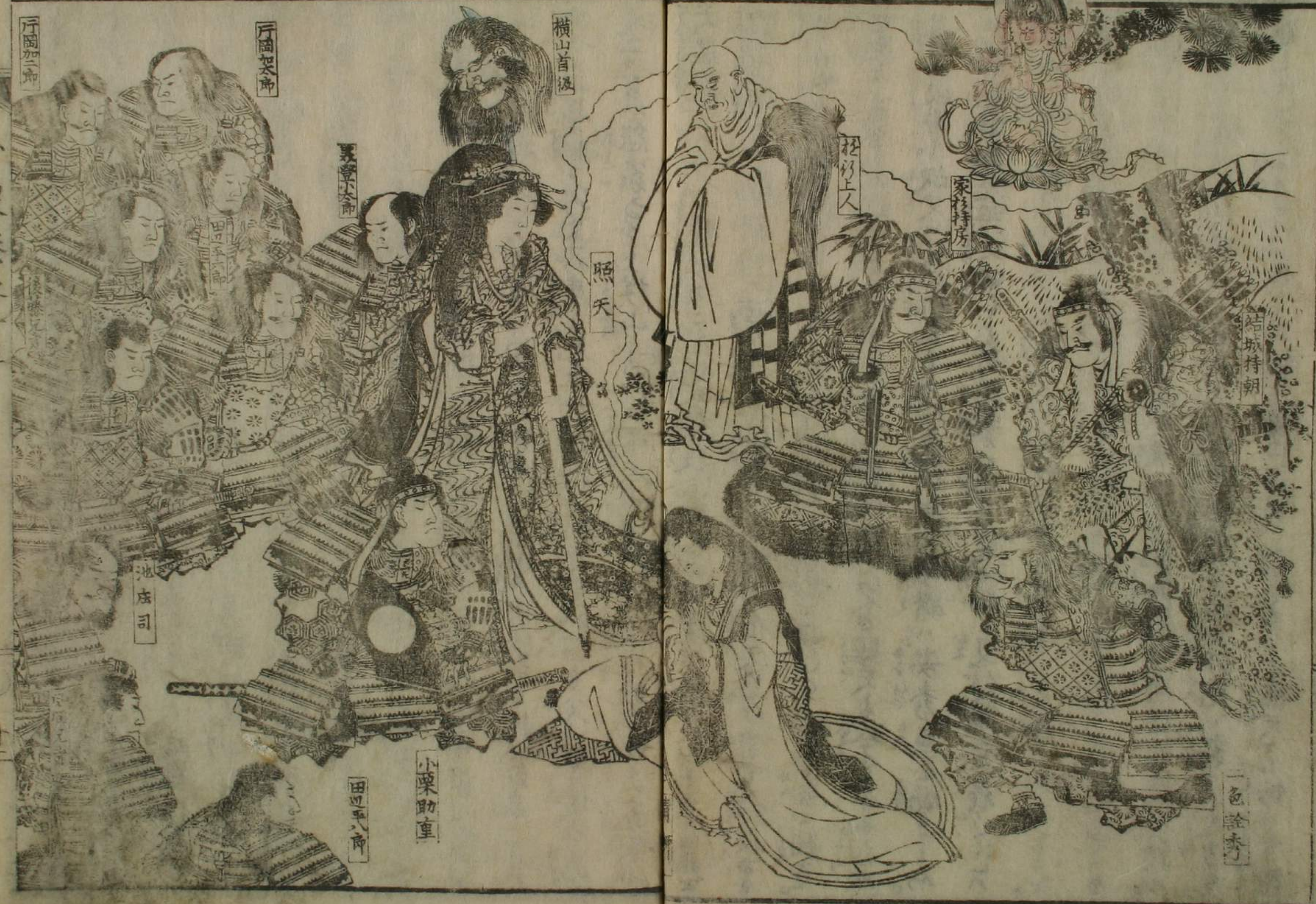
滑りまきやとありたれば庄司畏れ堀落し至り格を引る知とて後  
 その間五間やともやわんと入るは堀の水より一丈余も切落さる一矢を  
 仰ぎらるふ此方の大樹と彼方の大木と梢の枝を接する庄司も  
 より心は彼木を攀上の梢の枝を伝ひあふ對ひの者やりのまは只  
 猿猴が梢を伝ふは果ては何事とて入るふ彼引る格をおぼしめ  
 扇を扇ひては招き此橋を渡る人々の廿三三人あらしく動じ  
 小栗とて存ひ庄司も今夜の一番やられ流しや入る波せ者も下知  
 かく其波せのえは格を渡せ誰うとれ後るべき我若らしとて  
 此らちちも風を後者田辺の兄弟の庄司が比敷が先定我らとて  
 窄ううまきと六人の人へ一板の扉の扉を叩きて曳く声して押る

ごとくも大ききやうは門よりしが至双の大力六人して押るがゆりくとも  
 牛から縛る貫木お折る扉の八字小開れりその物音も熟醉はる横山  
 方寝るに醒く慌忙きやよや夜討の入りはまらよ太刀よと立強る叫喚地獄  
 の罪人が呵責を達ふも幼やらん此村樹多にまらりて家枝持房山上より  
 塞中の光景を窺ひ居りか俄に立強くと此の溝うてくならねはと小栗  
 責入りしそ後且返りそ人々と其波せの先は山とてはるの兵ホなとら  
 躊躇へん一時中塞中より入る間をとりて揚るけり横山方こそ又  
 おどろれしう乱れ我先お逃んとてさきか家徒の人々の敵と小栗かたは  
 長途をまねぬやこのさうのれつんが討たれと入る勢と二の木さ  
 支へり小栗が郎黨後探はるの諸軍お魁一の木さふ入るとる賊お  
 稱待今夜又洗草舎名若大島軍吾ありあひく防れりともちふしの

間うらへ風間次郎正貞横合より責かき勢ひはあつふ今夜又とて下陰  
 突伏より舎名を軍吾の友人あつふ勢ひを救つとすを後夜兄弟刀を  
 踊りかるとして賊將二人枕をなぐり討たせりかてまねた二の木戸  
 なる破れ家枚小栗の勢ひ入り斬りて横山太郎安嗣同次郎安春  
 は二人まねた有る山行力丸相摸鬼三蟻門兄弟熊川父子殺みま  
 した体守徒のり此下討た彼軍討た今とてあつふものなりあつふ  
 横山安秀と一色詮秀と討たりのはしあ漏れやとてあつふ塞外の陣  
 照天姫英登小太郎片岡兄弟青柳を殺し壺に忽ち使とて云こつた  
 我く塞外あつてあつふ兵と家不雑兵の中あつたあつたあつた  
 生捕りつる安秀あつてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 友利斜りつるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 及の御免もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 使お分けて還つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 小太郎小命とて解りぬ容貌を正つたあつたあつたあつたあつたあつた  
 今日天と共つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 われとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 ともあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 奴家が父の道命とてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 時は法傳は侍り結とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 姫君あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 何をあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 相掙のまよとてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

折る小栗と云ふ人なき。この頭と季々くゆえと没命なり。こころを  
 仇とらふ人いふもあはれなき。涙とさめいふもあはれなき。横山安秀の  
 最若よりしては。俯きりのとも云うと居りし。何思ひらんまのり。側へ  
 居る雑兵の短刀奪ひ我と赤左の腰。突までとらと座して照天。射ひ  
 して苦しげ。息を衝。姫青柳の女也。刃を殺しても孝行を。とらと根を  
 やうく我の男也。在るが。因心我とらと不義となを。刃の非を。取  
 ち。さし出せば。昔應永辛卯の三春。名武が庭。と助幸と。照天。加ふ  
 射。換して我。拙さるを。恥らう。小栗。好くさし。おる光。彼が才。愛し  
 娘を。許嫁と我。仇と。あふ。人。と。置。さ。る。の。腹。さ。し。と。れ。り。名。武。を  
 小栗を恨む。光と。我。も。殺。し。て。小栗を。護。害。せ。り。必。竟。邪。め。り。公  
 より。善。人。を。殺。し。る。其。後。我。子。の。愛。し。み。い。れ。い。う。悪。事。な。り。は。終。り。お  
 天罪。脱。れ。り。一時。子。も。只。牙。を。殺。し。現。在。姫。の。身。に。披。れ。六。十。年。の。非。を  
 知。り。後。悔。さ。る。小。甲。斐。も。は。姫。が。み。あ。の。難。女。な。れ。と。さ。る。伯。父。の。名。ふ。め。り。射。換。す。る  
 る。り。や。と。が。自。殺。を。し。は。れ。り。我。身。の。光。非。を。悔。ひ。と。ら。を。善。人。翻。さ。り  
 せ。め。の。あ。る。い。ふ。あ。る。ま。し。い。き。ま。幸。く。首。射。候。と。し。と。照。天。と。今。さ。る。小。公。成  
 善。人。改。め。り。叔。父。の。父。の。仇。を。と。ら。り。射。候。踏。踏。の。安。秀。声。を。励。ま。し。り。  
 し。甲。斐。も。か。れ。照。天。姫。も。の。我。勢。の。流。り。あ。せ。世。切。り。及。び。臆。さ。る。後。に。し。り。  
 我。も。苦。痛。さ。り。う。り。殺。し。さ。る。心。い。そ。う。我。も。と。突。ま。り。刀。と。右。小。公。成。と。さ。る。  
 照。天。と。れ。の。い。ふ。励。ま。し。り。い。う。も。伯。父。の。免。れ。父。の。仇。を。と。ら。り。と。せ。り。畏。こ。し。こ。も  
 首。を。い。ふ。賜。給。と。さ。る。も。長。刀。の。て。雄。こ。し。も。後。脊。小。公。成。と。さ。る。久。と。れ。が。  
 横。山。が。首。の。前。を。さ。る。後。お。け。り。世。切。り。射。候。み。お。免。れ。と。さ。る。一。太。刀。と。さ。る。  
 怨。ま。し。て。と。ら。ゆ。れ。り。豫。め。の。約。を。易。ゆ。れ。り。と。や。と。し。と。照。天。と。知。り。善。人。柳

小栗夫  
討得  
功  
全



戸岡三郎

戸岡安市

横山首渡

裏守小六郎

照天

松乃上人

家持持房

結城持朝

池田司

小栗助重

田四八郎

色陰寺

喜びまらり刀をぬき横山が骸とを刺りけり。此の照天へ懸て有り。この  
置し依り父の神主の前は横山が首が供へ香を焚く南無と云ふ煙をよめせよ。此の  
仇安秀を今日只今討つ手向の行舟の苦難を免れ成佛得脱  
久しと懐舊の涙せれぬ念佛教遍唱ゆき青柳も懐中より。亡父  
道分が神主をせし小言の所居をみる涙をぐり云りうらな怨家横山  
安秀との奴を力及らぬと姫君父の心信を深く憐みまふうと。今  
仇を討さしむしね奉次のを念や暗けて速に成仏遂さしめ人や有る幽霊  
横生菩提と念をこころに横山を刺する刀と取りて我とつがまに懸て  
うらなと切れ人々うらなと驚きひらり。青柳涙が拭ひぬるが  
うらな小憂恥えつらむ速に死ななれどかなと。一ツを父の菩提の  
又二ツの怨家をぐり横山との主人の由縁の人を在はぬ妹を多期お

と。さてその親を愛するなれと語るとは父の娘と。人も人を憐みまふ。  
此のしも賊塞俄に父を織して焼かれ美登小を命とて照天  
小對ひ賊既よこころおほはるはげ大おやどなくは凱旋あり。と云も  
終るる小栗家救のあねを勢に依り其のれ照天は元元元元  
をばせ出迎へ引率を陳中へ入しめあり。神々とと祥小速横山と効  
首虜お入るとし。大将その効を賞し。おのが仇一色を脱逃する  
悔る村々。結城拵一色詮秀と郷め此陣中へ牽き入り。小栗の遺り  
りのる。我は下が常お一色詮秀を討てんと。今つね前詮秀  
武蔵の陣と出奔の所も。その去向を窺て。一色在を告げ。今まこの所を  
逃去んともあんと。蜜や手勢を多し。逃し出せぬ地方に埋伏せしお

果して刃ひらきを待て捕まへて幸なり。是前の言を背する事あり。詮秀を小栗よふせが助きて天よ喜び地中喜び。是も小栗下の信成よよみて年次を素懐を遂げり。此恩のつたえられしと云く感謝を遂げり。お房に對ひてや。父もあつて結城の好意をよみて年次を仇に捕まへり。足下も我も恨の同じ怨家。いざ諸もに討んとあるお房に辭してより。結城の一をを生捕し。是も足下の為とて我卿も功なり。いざとて討たれり。是の足下の太刀をなげり。我二の太刀をゆき。譲ると再三再四及び。今を助重一太刀をされ。お房二太刀を下して詮秀を三断となし。兩將を首とりて各父の靈よ手向。数年の本懐を遂感在の涙をしせり。はりのりや凱陣して今日のる。徳倉屋よへむ。既に陣を拂り。此討夜を

わのくと明ら。朝霧陸を向ひ。孫次寺の控行上人。忽然して出ま。人く。とてお房。小栗夫婦。上人の道恩を感れ。人より前を進み。今日仇を討て。述べ上人の道徳。ふり。恩を謝され。上人も喜び。人の功を賞し。云や。思。是。熟。あ。人各命のて。命よ逆者。亡び命。従。の。果。結城。家。校。の。人。東國。在。て。吉。小栗。の。人。の。渾。東國。産。され。在。て。吉。西。お。赴。ひ。幸。の。り。そ。を。奈。何。と。い。ふ。切。り。相。模。中。と。ま。婦。離。散。せ。し。と。英。徳。の。行。て。再。會。せ。り。再。び。お。房。歸。り。及。び。助。重。奇。疾。を。稟。照。天。股。眩。を。失。え。り。我。言。し。隨。ひ。又。西。と。病。平。愈。し。ま。婦。本。懐。を。遂。げ。る。至。る。西。下。居。を。ト。お。お。田。貴。を。ひ。く。子。孫。を。保。せ。ん。と。又。告。知。し。む。さ。き。の。お。お。を。結。城。の。ま。ご。の。怨。角。の。せ。昔。さ。ら。ら。谷。の。觀。音。堂。と。権。化。の。翁。よ。今。て。説。話。し。る。を。

後藤公母のむねのむね一色側在りてこれを父結城の功と奪んと後藤を構  
 公を感ず。小栗と名武とせしむ。観音堂を毀す。君命と云ふ。佛  
 堂を毀する。眞野忽ち報ひて家行を亡びたり。親舅のあまをり。さう谷  
 の観音堂を再建し。孝女とれよ。と説き。されば小栗助をかん  
 教す。と云ふ。鎌倉殿へ上速。再建す。と云ふ。又上人前より。の  
 我。が。牙。西。在。て。宜。し。と。あれ。此。後。西。國。赴。く。と。然。れ。ど。其。の。初。の。腹。公。乃  
 郎。堂。十。人。の。東。國。の。産。な。る。其。の。死。を。東。ふ。お。め。んと。其。幸。なる。彼。観。音。堂。の  
 下。一。大。の。坑。の。り。と。なり。其。心。我。が。警。の。端。を。切。て。これ。を。納。め。東。山。の。土。中  
 には。均。く。且。仁。因。縁。を。結。ぶ。現。當。二。世。も。安。う。ん。曾。ま。其。横。山  
 が。許。す。至。り。し。時。鬼。研。の。馬。を。り。て。害。せ。せ。れ。ん。と。か。ん。て。是。よ。ん。く。照。天。次  
 妻。と。する。こと。を。ひ。く。り。て。後。箱。根。の。危。難。は。鬼。研。が。助。め。ら。び。の。生。命。全。を

へし。馬の死。お。故。を。馬。に。観。音。小。念。ん。と。納。め。れ。ば。彼。堂。の。本。ま。る。馬。に。観。音  
 を。安。居。せ。ん。と。奈。何。あ。ん。と。ま。い。り。遊。行。上。人。大。に。お。お。ひ。と。り。宜。し。非。ど。や  
 さ。ら。し。青。柳。を。り。て。其。堂。は。居。じ。め。朝。暮。香。華。を。供。へ。め。が。あ。り。宜。し。非。ど。や  
 と。い。ふ。人。上。人。の。恵。を。感。激。と。め。め。あ。の。て。青。柳。上。人。の。徒。身。と。なり。名。を  
 青。柳。尼。と。名。を。り。勘。く。小。栗。結。城。家。校。の。三。ね。と。一。を。横。山。の。首。級。を。携。へ。て  
 漢。倉。へ。還。り。持。氏。公。の。実。檢。ま。と。り。其。切。を。索。り。名。因。賞。の。地。を。賜。け。て  
 中。に。小。栗。助。ま。る。在。行。上。人。の。示。を。信。じ。て。ま。へ。の。け。願。を。換。へ。く。さ。う。が。公。母  
 觀。音。堂。再。建。の。こと。を。請。う。り。其。中。お。ま。り。し。は。許。容。の。り。小。栗。の。お。び。て。自。ら  
 ち。行。く。こと。を。管。じ。此。所。助。き。後。十。一。人。の。壘。の。未。と。切。く。彼。坑。中。に。納。め  
 たり。是。前。に。説。き。し。此。坑。の。新。田。義。貞。主。従。の。靈。を。封。じ。り。が。堂。を。毀。る。時  
 再。び。世。に。出。く。小。栗。と。後。と。生。れ。出。前。世。の。因。縁。よ。り。て。今。此。坑。に。君。臣。十。一。人



髪を納めたるを不思議なれがて日ありて佛堂再建の功ありしに、  
さしりけりたるをなれが馬に詔音を安置し、招行上人を請ひ導師に供養  
をなるとお村氏とて、の漁翁の牛、群集し、結縁をみよりの、  
平て此堂を居し、仏に仕へば、なりまより小栗の漁翁殿を、  
登りお軍家の足兼あふ、一色横山と、首に、詔音堂再建の、  
詳ふや、上、お軍家も、山威あり、丹後國、  
恩を誦し、夫婦の共、郎黨を、新恩の、  
恩成ち、夫婦君は、道と、樂み、政正、  
近郷の、国人小栗の、徳を、慕ひ、丹後、  
同、男女の、子ども、教を、事と、目出、  
小栗外傳卷之十五 大尾

北柳芳

外傳ニ傳フニ、唯我社、  
余輩、男ガ心ヲ、  
香成、  
地下、  
唯我社、

北柳芳

